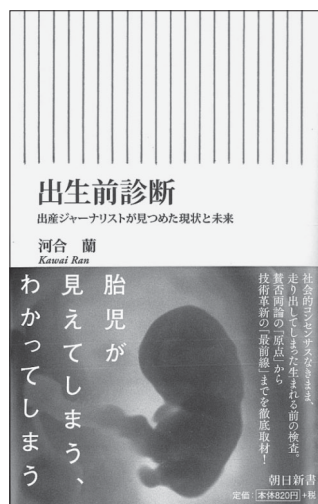


この本、
いかがですか？

『出生前診断 出産ジャーナリストが見つめた現状と未来』



河合蘭 著
本体 820 円 + 税
新書判／朝日新聞出版(朝日新書)／
2015 年

評者

橋本洋子

周産期心理士ネットワーク代表、
臨床心理士

関係者の生の声や、歴史的背景から 出生前診断を考える

「出生前診断の普及に、賛成ですか？ 反対ですか？」と問われたなら、あなたはどうか答えるだろうか。出生前診断に関する十分な知識があっても、否、十分な知識があればこそ、答えは容易ではないだろう。しかし、今、周産期医療にかかわる限り、出生前診断にまつわる問題を避けて通ることはできない時勢となっている。是非論はさておき、あらためて出生前診断をめぐる現状と、その歴史的背景を見つめ直してみるのも大切かもしれない。

著者は「出産ジャーナリスト」の立場と取材力を生かして、出生前診断を体験する女性たちや、出生前診断を手掛ける医師をはじめとする多くの関係者に直接会い、生の声を聴いていく。読者は読み進めるうちに、1つひとつの事実の裏側に、世の中のステレオタイプな思い込みとは異なる、

まさに人間が息づいていることを知るだろう。

出生前診断は日本において独自の展開を遂げてきた。本書ではその軌跡を丁寧にひも解いていく。羊水検査の導入にあたっては、障害者の人権というところから大規模な抗議活動が起こったが、丁寧な対話と社会を巻き込んだ議論を尽くすことがないまま、国や自治体の施設では検査を行なわないことで終息した。

1990年代には、検査会社による営利事業として母体血清マーカー検査が登場した。この時は厚生省(当時)の専門委員会で真剣な議論が交わされたが、国の指針として発表された最終見解は、「医師が妊婦に対して、本検査の情報を積極的に知らせる必要はない」というものだった。超音波検査によるNT(項部透明帯)の計測に関しても同様のスタンスが維持された。こうして議論は先送りされる形となり、出生前診断をめぐる説明のあり方や心理的サポート、体制づくりの面でも進歩は遅れた。

現在、NIPT(無侵襲的出生前遺伝学的検査、いわゆる新型出生前診断)は世界のさまざまな検査会社によって開発競争が行なわれ、グローバル・ビジネスとして席卷しようとしている。日本でも、もはや「知らせる必要はない」では済まされない状況となった。医師たちはNIPTコンソーシアムを立ち上げ、遺伝カウンセリングを行なうことを条件に、臨床研究という形でNIPTを開始した。「知らせる必要はない」から「知らせる」方向へと舵が切られたという意味で、著者はこの動きに一定の評価をする。出生前診断が胎児治療へとつながっていく希望もある。

適切で十分な情報が提供されたうえで、個々の女性や家族がしっかりと葛藤し、覚悟をもって選択する。そのプロセスを支えるのが、助産師である皆さんや、私たち周産期心理士の仕事ではないかと思う。本書が対話の糸口の1つになることを期待したい。

①